

民主主義の「光」と「影」―未来に希望をつなぐには

佐藤 克廣

二〇一五年は、五〇年後どのように記録されるであろうか。言うまでもなく、「安全保障関連法」の成立は、日本国憲法を陵辱する暴挙である。立憲主義すなわち近代国家の基盤を葬ろうとしているかのようにも見える。このままでは貧富の差の拡大など日本崩壊が始まった年として記憶されてしまいそうである。

年末のテレビでは、映画『スター・ウォーズ』のコマージュが頻出した。第一作目からのファンとして何に魅せられたのか。キロードは、「フォース」(第一作では「理力」と名訳されていた)である。「フォース」には「光の面」と「暗黒面」とがある。白土三平「サスケ」は、一九六八年テレビアニメ化されたとき「光あるところに影がある」で始まっていた。ストーリーはともかく、冒頭のこのナレーションだけはなぜか覚えていた。それから約一〇年後の一九七七年に公開された「スター・ウォーズ」でも、「光」と「影」(暗黒)がテーマとなっているのは不思議である。

藤井聡編『ブラック・デモクラシー』(晶文社、二〇一五年)を読み出した瞬間、「サスケ」や「スター・ウォーズ」の断片、そして、「光」と「影」が走馬燈のように頭の中を回りだした。民主主義は「フォース」なのではないか、と。いまさら何ぞ!と言われそうぞうぞうと恥ずかし

い。しかし改めて、民主主義の「光」の面を単純に信奉しているのでは、足元をすくわれるのではないかと。

大澤真幸は、岩波講座「現代の現代性―何が終わり、何が始まったか」(岩波書店、二〇一五年)の第一巻巻頭論文で、われわれは「完成した民主主義」というものをもっているわけではない、と述べる(大澤真幸「民主主義を超える民主主義」に向けて)、同書、四頁。われわれが手にしているのは「完成した民主主義」ではないというよりも、そもそも「完成した民主主義」が、現在よりもより、将来においても存在するのであるか。「スター・ウォーズ」の最終結末を想定できないが、「フォース」と同じく、「民主主義」も「光の面」と「暗黒面」とを併せ持つて進展していくのではないだろうか。

では、「光の面」を信奉(信奉という言葉は民主主義に似つかわしくないかもしれないが)していくには何が必要であろうか。また、「暗黒面」はどのように勢力を増すのか。

杉田敦は「今日、代表制は深刻な危機を迎えている。まず、代表されるべき「私たち」が何なのかがいまいとなり、それが代表制の意味を大きく損ねている」(杉田敦「政治の現在と未来」(前掲岩波講座、九八頁)と述べる。そして「主権」が、国内的には少数

意見を封じる「多数者の専制」の装置となりうる(同、一〇〇頁)と注意を促す。また、三浦まりは、卓見に満ちたその著作「私たちの声を議会へ―代表制民主主義の再生」(岩波書店、二〇一五年)の中で、「カルテル政党化現象」(同書六二頁以下を参照)を危惧している。これらは、まさに民主主義の「暗黒面」出現に注意を促したものである。

一方で、藤井聡は、徹底したヒリリズムの排除、すなわち、民主主義の「光の面」と「暗黒面」とをしっかりと認知し、「暗黒面」に踏み込まないことの重要性を強調している。藤井は「この世には美しいものとそうでないものがあるという事実を、あるいは、おもしろいものとおもしろくないもの、楽しい事と楽しくない事があるという事を、実感を伴って体験するだけでいい」(藤井聡編前掲書、六二頁)と処方箋を提示する。

しかし、「暗黒面」は、時に魅力的である。真実を考え曝くことを放棄し、流れに身を任せれば片時の安寧を手に入れたかと錯覚してしまうのだから。「長い暗黒の歴史の後に、人類はようやく政治から解放された。運命に抗い、自然の秩序を覆そうとした政治に死を。政治のない世界に幸あれ。」と唱える人々の出現(杉田敦前掲、一〇三頁)をわれわれは座して待つてはいけない。暗黒の使者は、甘い言葉で人々を誘い込む。おさおさ注意を怠らないこと、理性で考えること、これをうつかり忘れたとき、民主主義は「暗黒面」に深く侵蝕されてしまう。

へさとう かつひろ・北海道大学教授/当研究所理事長